

資料3 里山にたいする住民の意識に関するアンケート調査結果

里山への関心が高まっているが、里山という言葉にはさまざまな解釈があり、人により受け止め方にも違いがみられる。里山の環境保全を進めるにあたっては、地域の人々が、現在里山とどういのかかわりを持ち、また里山に対してどういう意識をもっているかを把握することが重要である。以下に、プロジェクトとして長野県民を対象に行なった里山に関する意識調査の結果を示す。調査方法の概略は表1のとおりである。

(1) 調査結果

①長野県の自然と自然保護に対する意識

長野県の自然環境に満足している人の割合（「満足」と「どちらかといえば満足」の合計）は全体で66%であったが、長野市と松本市では57%、その他の市では67%、郡部では70%となっており、都市部よりも郡部で満足度が高い傾向がある。年代別では、20代で71%、30代で72%であるのに対して、50代で64%、60代で61%となっており、若年層の方が満足度が高い傾向がある（図1）。

県内の自然保護対策に対しては、「もっと推進するべき」が全体で55%あり、「今のままでよい」が19%、「もっと緩和するべき」は5%と少ない（図2）。自然保護上の優先課題としては、「環境教育の推進」が73%でもっとも多く、「市民活動の活性化」が52%、「調査研究の推進」が48%、「法的な規制強化」が42%などとなっている（図3）。

②里山とのかかわり

里山に「親近感を感じる」は市・郡部とも87%の高率になっており、「親近感を感じない」は市・郡部とも7%と少ない（図4）。里山とのかかわりの頻度では、「毎日」と「ときどき」が合わせて郡部で77%、市部で67%と郡部の方が多く（図5）、農・林・漁業に主として従事する人では88%とほかの職業よりも多くなっている。里山でしたことがあることとしては、「キノコ・山菜等の採取」、「趣味や憩いのための散策」、「川遊び」、「農業や家庭菜園などで野菜づくり」、「昆虫採取やザリガニ取り等」が市・郡部とも50%を超えている（図6）。

表1 調査方法

調査対象	長野県内に住む満20歳以上の2000人（市部1000人、郡部1000人）
抽出方法	層化3段無作為抽出法。対象者は各市町村の選挙人名簿から無作為抽出
調査方法	郵送
調査期間	2004年2月5日～3月11日
調査地点	84地点（17市33町34村）*
回収結果	有効回答数1120人（56%）
調査企画	長野県自然保護研究所（現 環境保全研究所）
調査実施	社団法人長野県世論調査協会

*調査当時の市町村にもとづく

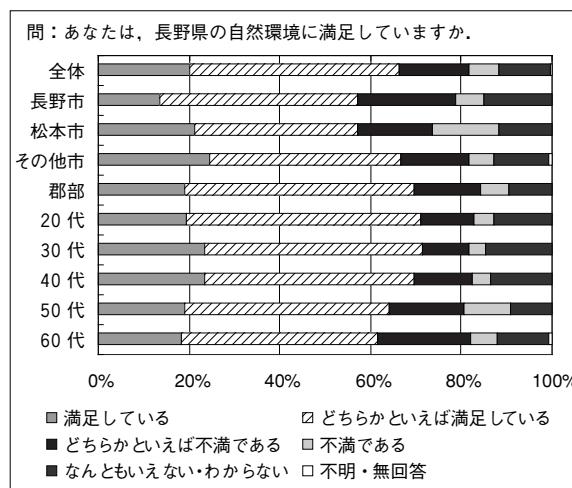


図1 長野県の自然環境への満足度

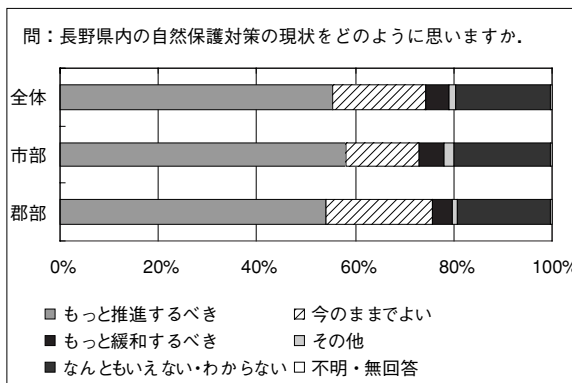


図2 自然保護対策

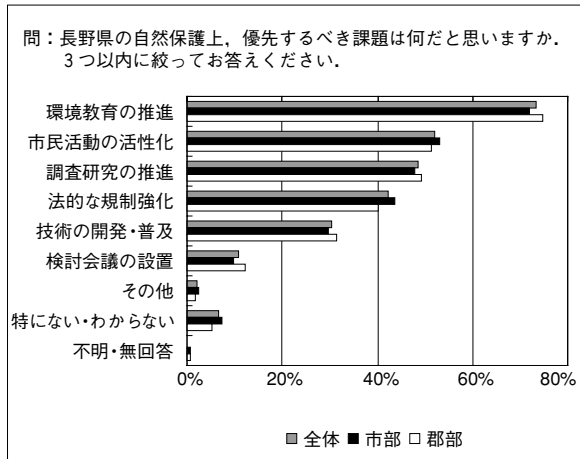


図3 自然保護上の優先課題

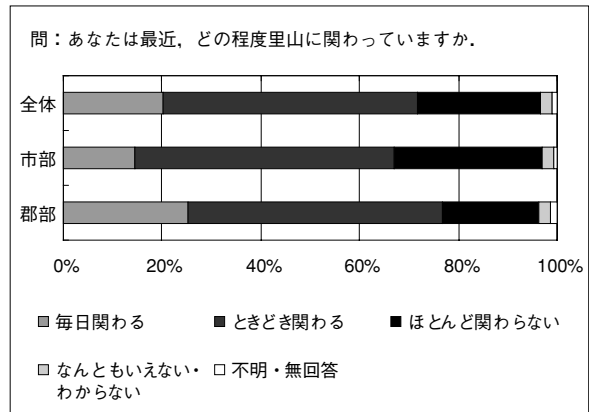


図5 里山とのかかわり頻度

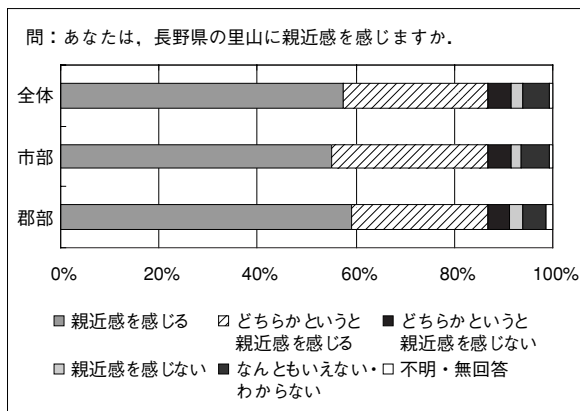


図4 里山への親近感

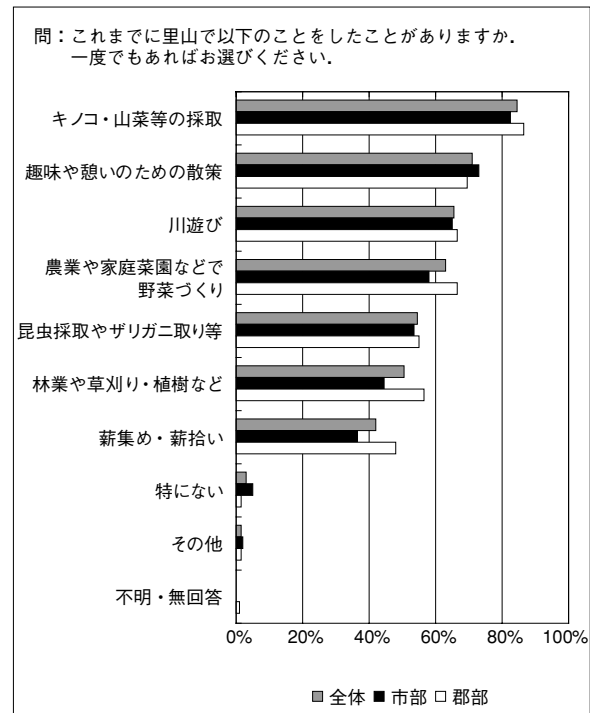


図6 里山でしたこと

③里山の生き物に対する意識

里山にすんでいる生き物で思いつくものとしては、哺乳動物や山野草など合わせて422の名前があげられたが、もっとも多くの人(30%)があげた生き物はタヌキで、以下、カブトムシ(25%)、サル(25%)、イノシシ(21%)、わらび(21%)、キツネ(18%)、カモシカ(18%)、イワナ(17%)、クマ(16%)、キジ(16%)となっており、上位には哺乳動物が多く入っている(図7)。

ツキノワグマ、サル、カモシカなどの中・大型動物が、最近、数を回復させはじめていることについては、「良いことだと思う」が市部で37%あり、郡部の29%よりも多くなっている。逆に「困ったことだと思う」は郡部が37%で、市部の24%よりも多くなっている。このほか、「なんともいえない・わからない」が市部で38%、郡部で33%あり、判断が難しい事柄であることをうかがわせている。また、年代別では「良いことだと思う」が20代で49%あるのに対し、60代では26%しかなく、若年層ほど中・大型動物の数の増加を肯定的にとらえている傾向がある(図8)。

そして、これらの中・大型動物が里山の森林にすみはじめていることについて、「困ったことだと思う」は

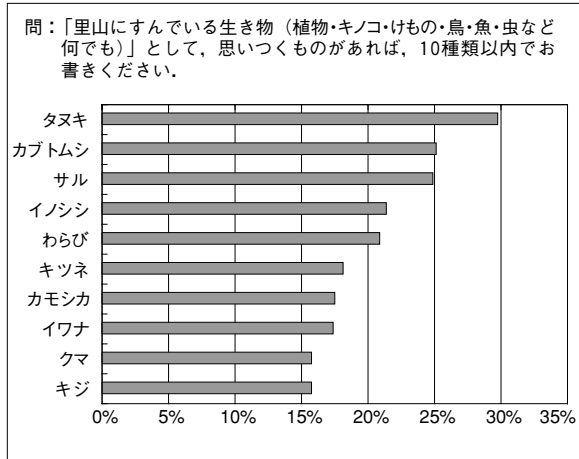


図7 里山の生き物

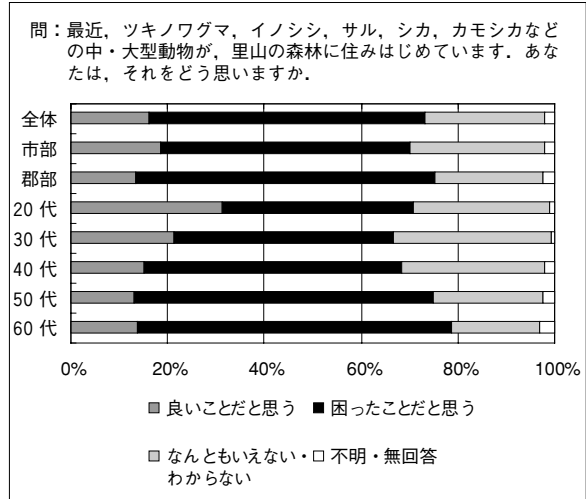


図9 野生動物の里山での生息への思い

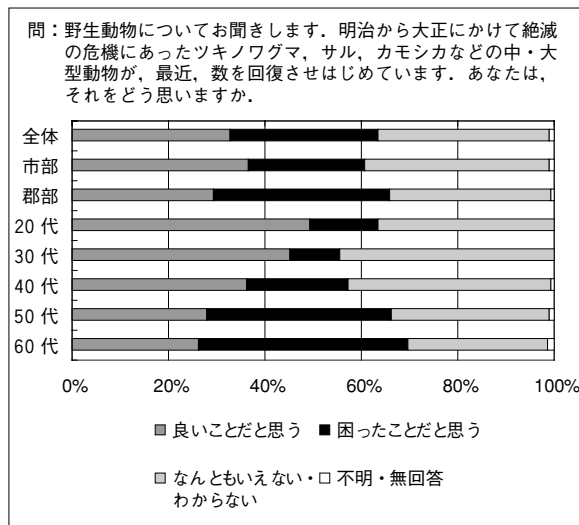


図8 野生動物の生息数回復への思い

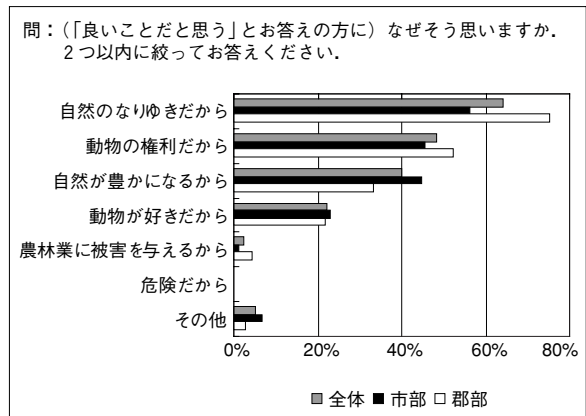


図10 野生動物の里山生息を良いことだと思う理由

郡部で62%，市部で52%とともに半数を超えており、「良かったことだと思う」は市部で19%，郡部で13%と少ない。また、若年層より高年齢層の方がより否定的にとらえている傾向がある（図9）。また、里山の森林に中・大型動物がすみはじめたことを「良かったことだと思う」理由としては、「自然のなりゆきだから」が郡部で75%，市部で56%と多く（図10）、「困ったことだと思う」理由としては、「農林業に被害を与えるから」が郡部で90%，市部で86%、「危険だから」が市・郡部とも77%と多くなっている（図11）。

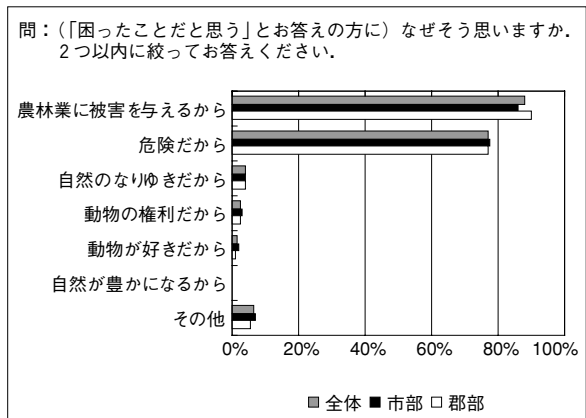


図11 野生動物の里山生息を困ったことだと思う理由

④地域の伝統行事や組織へのかかわり

最近の1年間に何らかの形で参加した行事や伝統芸能では、「お盆の迎え火・送り火」が郡部で76%，市部で71%、「お祭り」が郡部で72%，市部で66%、「どんど焼き（せいのかみ・三九郎）」が郡部で50%，市部で44%となっており、郡部が多めになっている。「初詣」は市・郡部とも74%であった（図12）。また、昔話・

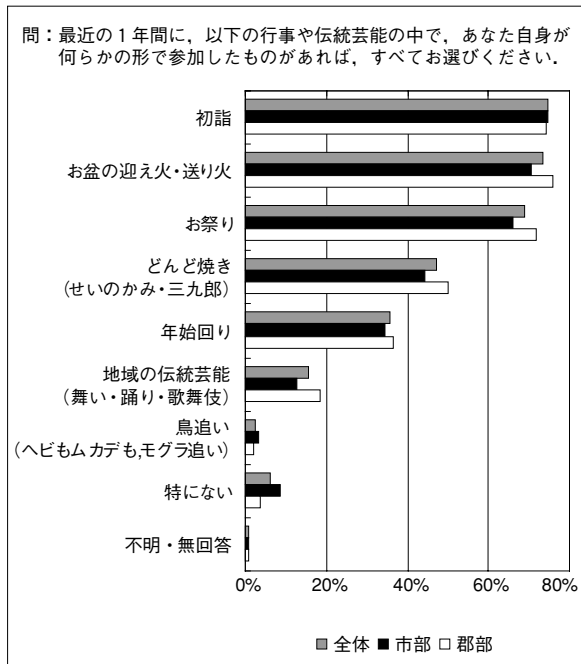


図12 最近1年間に参加した行事など

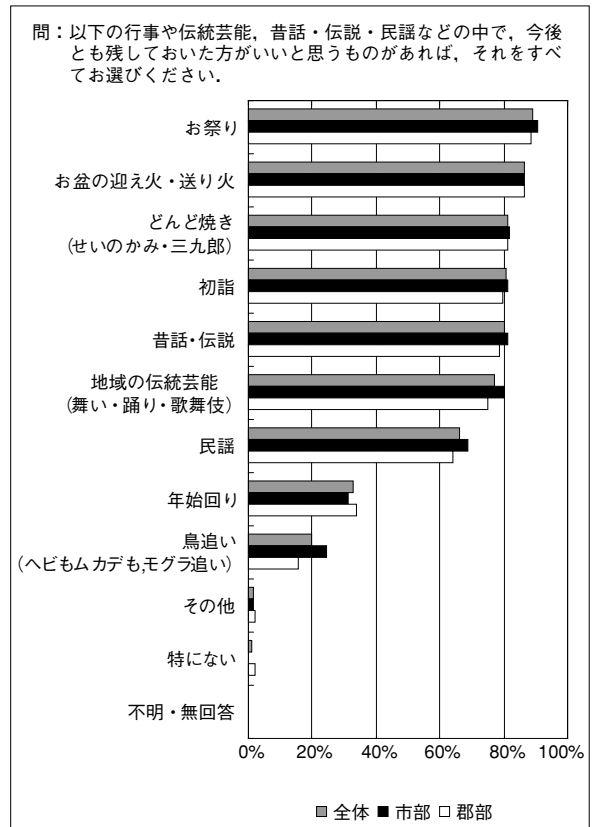


図14 残しておきたい行事など

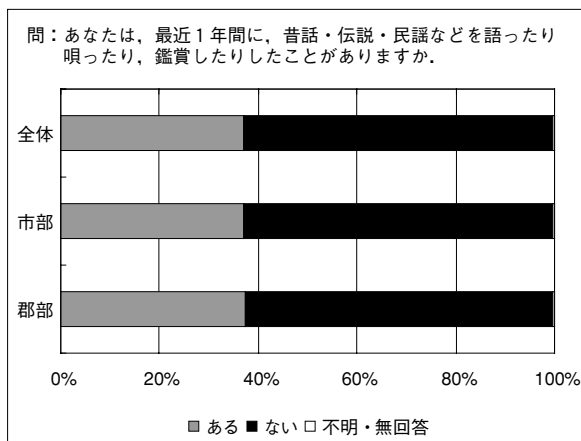


図13 昔話・伝説・民謡などの実演・鑑賞

伝説・民謡などを語ったり唄ったり、鑑賞したりしたことが「ある」は市・郡部とも37%であった(図13)。残しておきたい方がいい行事や伝統芸能としては、「お祭り」が市部で90%、郡部で88%ともっとも多く、「お盆の迎え火・送り火」が市部で87%、郡部で86%、以下、「どんど焼き(せいのかみ・三九郎)」、「初詣」、「昔話・伝説」なども80%前後となっている(図14)。

最近の1年間に日常生活の中で参加した組織や作業としては、「地域の共同作業(道路普請、用水路の掃除など)」が郡部で65%、市部で60%ともっとも多く、次いで「寄合い(世帯主の集まり)」が郡部で56%、市部で51%となっており(図15)、どちらも男性が女性より20ポイントほど上回っている。「特にない」は市部で16%、郡部で13%となっており、若年層で多い傾向がある。

⑤今後の里山利用と保全への意識

里山で暮らすことを「魅力的だと感じる」は、市部で80%、郡部で79%とどちらも多いが、年代別にみると、高齢層ほど「魅力的だと感じる」割合が高い。20代は59%、30代は65%であるが、50代では84%、60代では86%と高くなっている(図16)。魅力的な点としては「自然が豊か」が市・郡部とも93%と高率で、

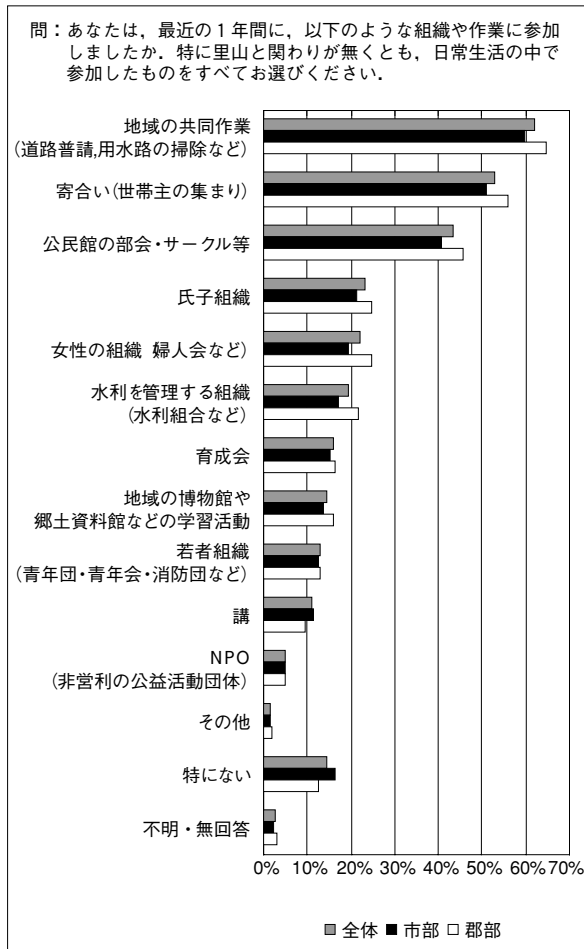


図15 日常生活での組織などへの参加

「取れたて野菜を食べられる」が郡部で62%、市部で53%となっている(図17)。一方、里山で暮らすことを「魅力的だと感じない」は、郡部で7%、市部で5%と少ないが、その理由としては「街から遠い」が市部で68%、郡部で46%と多くなっている(図18)。

里山での活動に「関心がある」は、郡部で65%、市部で63%と多く、女性より男性、年齢は若年層より高齢層の方が高い傾向もうかがえる(図19)。関心がある活動としては、郡部では「農業に関連した作業を行う(耕作・畦の草刈りなど)」が54%、市部では「自然観察会等の実施」が53%とともに50%を超える回答になっている。また、男性では「林業に関連した作業を行う(下草刈り・枝打ち・伐採など)」が55%、女性では「自然観察会の実施」が56%と一番多かった(図20)。

今後の里山の利用策としては、「地域住民の憩いの場・癒しの場」が市部で70%、郡部で68%と一番多く、

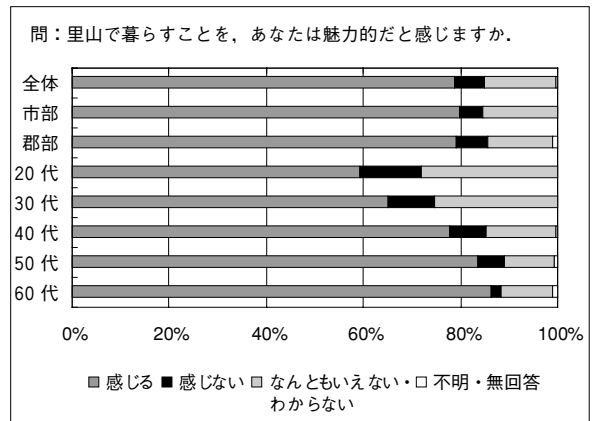


図16 里山暮らしの魅力度

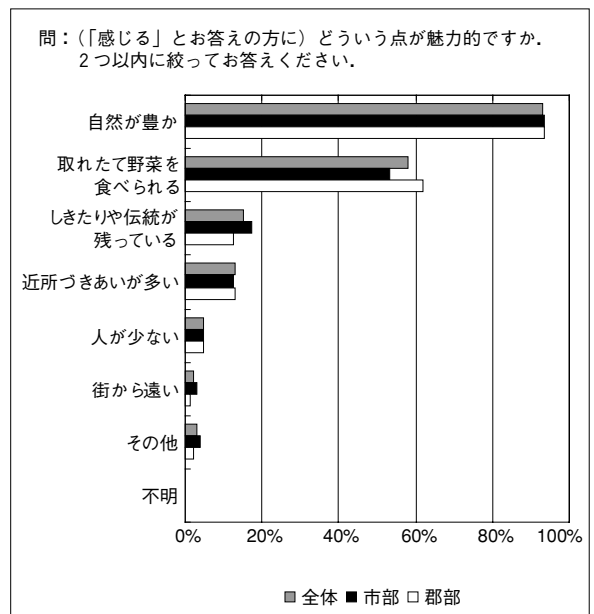


図17 里山暮らしの魅力

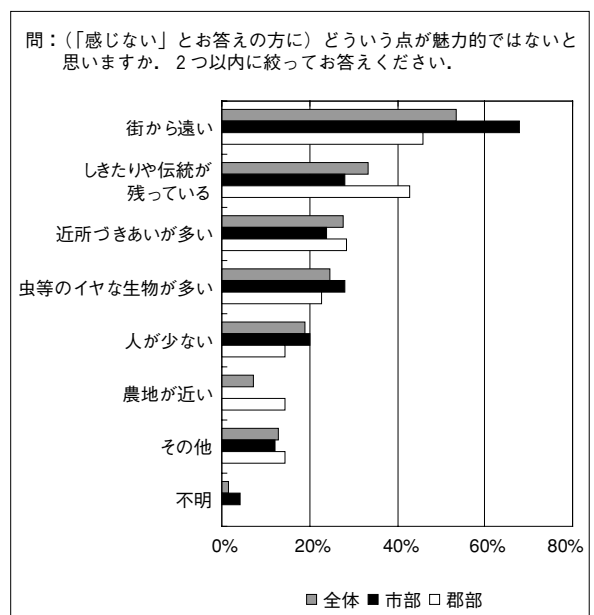


図18 里山暮らしの魅力でない点

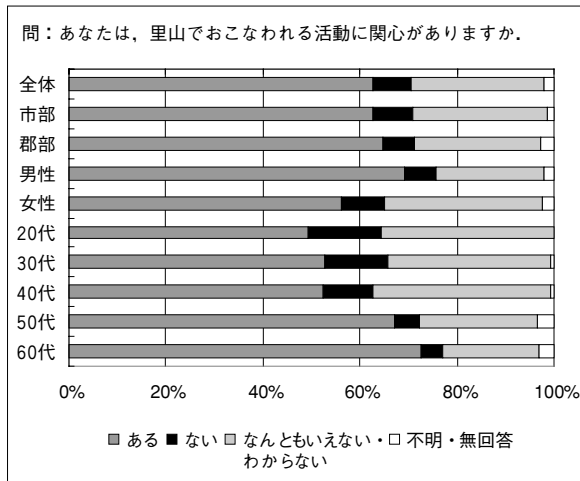


図19 里山での活動への関心

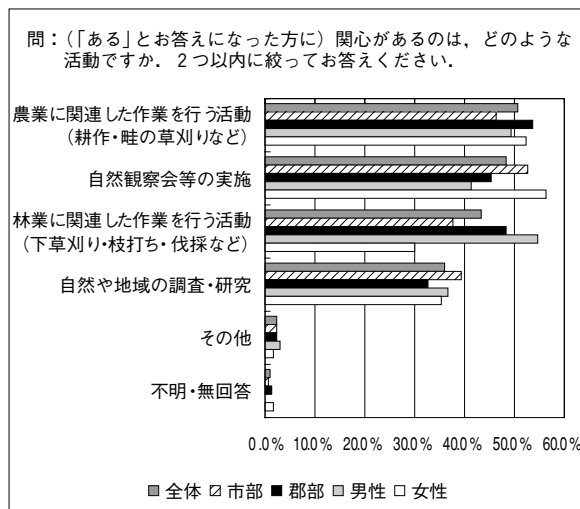


図20 関心がある活動

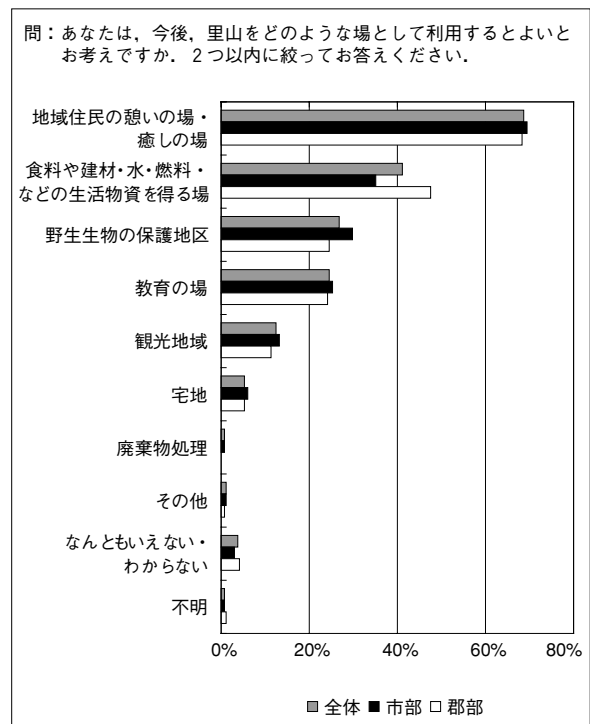


図21 今後の里山の利用策

「食料や建材・水・燃料など生活物資を得る場」が郡部で48%、市部で35%などとなっている（図21）。

里山の自然環境保全のために県行政などに希望することとしては、自然保護の推進を求める一方で、開発や整備が必要だとの意見があった。野生動物とのかかわりでも、共存とともに農作物への被害を減らすために駆除を求めるなどの意見も目立つ。このほか、手入れされずに放置されている農地や山林の再生、ゴミ対策の強化、小中学生や県民に対しての自然環境に関する教育や啓発の大切さを指摘するなどさまざまな意見があった。

(2) まとめ

里山に対する住民意識調査の結果は以下のようにまとめられる。

長野県の自然環境に対しては満足度が高く、自然保護対策では現状よりも推進することを求めており、環境教育の推進をもっとも優先すべき課題であるとしている。里山に対しては非常に親近感を感じており、里山の生き物としては哺乳動物が多く思いつくようである。なお、イワナ、カモシカ、クマなど、比較的高い標高域に生息する生き物が里山の生き物としてあげられた点は、信州の里山ならではの傾向といえるかもしれない。ツキノワグマ、サル、カモシカなどの中・大型動物が数を回復させはじめていることに対しては、「良いことだと思う」、「困ったことだと思う」、「なんとなくいいない・わからない」と判断が分かれているが、これらの動物が里山の森林にすみはじめていることについては、「困ったことだと思う」が「良いことだと思

う」を大きく上回っており、農林業に被害を与えたり、危険との認識をもっている。地域の伝統的な行事である「お盆の迎え火・送り火」や「お祭り」などへの参加は盛んであり、これらの行事を今後も残しておくべきだと考えている。里山で暮らすことを魅力的だと感じている人は多く、自然の豊かさがその魅力であり、今後の里山の利用策としては、食料などの生活物資を得る場としてよりも、憩いの場・癒しの場としての利用をあげている。

全体的な傾向は以上のとおりであるが、市部と郡部では若干の違いがある。長野県の自然環境への満足度は郡部の方が高く、中・大型動物の生息に対しては郡部の方が否定的な考えを持っている。これは、市部に比べて郡部の方が自然豊かで、農林業従事者の割合も高いことと関連しているものと思われる。郡部では農林業を通じて豊かな自然の恩恵を受けつつも、獣害による実際の被害や恐怖心が市部よりも強いものと思われる。里山利用に対する考えも、郡部では農業を通じたかかわりを中心に想定しており、この点で市部との違いが表れている。

一方、年代別の違いでは、長野県の自然環境への満足度は高年齢層より若年層の方が高く、中・大型動物の生息に対しても高年齢層よりも若年層の方が好意的な考えを持っている。しかし、里山で暮らすことを魅力的だと感じたり、里山での活動に関心を持っている割合は若年層の方が低く、関心がある活動も「自然観察会等の実施」や「自然や地域の調査・研究」が多くなっており、里山を自然豊かな場所としてはとらえているが、人の生活の場としての認識はあまり高くないようである。 (畑中健一郎・陸 齊・富樫 均)